

令和7年度兵庫県立阪神昆陽高等学校 生徒・保護者学校評価

- 1 実施期間 令和8年1月22日(木)～31日(土) 10日間
 2 回答対象 ①生徒316名/501名(63.1%) 前年度(64.8%)
 ②保護者206/482名(42.7%) 前年度(46.7%)
 3 評価段階 4:十分できている 3:おおむねできている 2:あまりできていない 1:できていない
 4 総合評価 A:達成できている (3.5<A≤4.0)
 B:できている (3.0<B≤3.4)
 C:努力を要する (1.0<C≤2.9)

区分	評価の観点	生徒			保護者		
		R6	R7	評価	R6	R7	評価
①	教師は、学習活動のねらいを具体的に説明している。	3.5	3.5 -	A	3.2	3.2 -	B
②	教師は、いじめの未然防止やいじめが起きた時に適切に対応している。	3.5	3.4 ▼	B	3.3	3.1 ▼	B
③	教師は、生徒が安心して学び合える環境を整え、そのための約束事を共有、実践している。	-	3.5	A	-	3.2	B
④	教師は、生徒の理解に合わせた授業を行っている。	3.4	3.5 △	A	3.3	3.3 -	B
⑤	困ったときに相談できるような体制が学校にある。	3.4	3.4 -	B	3.2	3.2 -	B
⑥	学校は、地域等の外部人材を積極的に講師に招き、様々な視点から学ぶ機会を提供している。	3.5	3.5 -	A	3.3	3.3 -	B
⑦	学校は、授業や行事などで、特別支援学校との共同の学びの場を設けている。	3.5	3.5 -	A	3.6 △	3.6 -	A
⑧	学校は、両校の授業や行事などの取組について、ホームページなどを通じて発信している。	3.6	3.5 ▼	A	3.5	3.4 ▼	B
⑨	学校は、生徒が意欲的になるような授業の工夫や研究に努めている。	3.4	3.5 △	A	3.1	3.2 △	B
⑩	部活動の顧問は、生徒の主体性、自主性を尊重した部活動の運営を心がけている。	3.5	3.4 ▼	B	3.3	3.2 ▼	B
⑪	教師は、生徒の話を丁寧に聞くとともに、生徒を否定したり、自説を押しつけたりしない。	3.5	3.5 -	A	3.1	3.2 △	B
⑫	教師は、生徒が考え行動する機会を作り、働きかけている。	3.5	3.5 -	A	3.3	3.3 -	B
⑬	学校は、生徒会活動の取組を支援したり、生徒会役員以外の生徒を啓発したりしている。	3.5	3.5 -	A	3.2	3.2 -	B
⑭	学校は、地域貢献やボランティア活動をする生徒の取組を支援したり、他の生徒を啓発したりしている。	3.5	3.4 ▼	B	3.2	3.2 -	B
⑮	学校は、保護者と連携し、教育活動を行っている。				3.2	3.2 -	B

令和7年度兵庫県立阪神昆陽高等学校 行動・実践目標評価

理念

阪神昆陽の両校がともに助け合って生きていくことを実践的に学ぶ機会を設定し、ふれあいを通じた豊かな人間性を育むとともに、社会におけるノーマライゼーションの理念を進展するための礎となる学校をめざす。

教育目標

- A 生徒の興味・関心や、多様な学習ニーズに応じて、主体的に学ぶことができる多部制単位制高等学校として、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む。
- B 人権尊重の理念に対する理解を深め、生命の尊厳を基盤に、自他に対する肯定的な態度と共生社会の実現に主体的に取り組む実践力を育成する。
- C 阪神昆陽特別支援学校が同一敷地に設置されたメリットを最大限に生かして交流及び共同学習を推進し、ふれあいを通じた豊かな人間性を育むとともに、社会におけるノーマライゼーションの理念を進展する礎となる学校をめざす。また、両校の実践を県内のみならず全国へ発信する。
- D 学校評議員制度や高校生ふるさと貢献活動事業、特別支援学校交流・体験チャレンジ事業などを活用して、伊丹市池尻地区や尼崎市西昆陽地区など、学校周辺の地域と連携した教育活動を推進し、地域に開かれた、地域に愛される学校をめざす。
- E 「教育は人なり」という言葉があるように、両校の教職員は、教育の専門家としての使命感と高い倫理性を保持し、豊かな人間性の涵養に努める。また、専門性と実践的指導力の向上や、社会の変化に対応した教育観を培うことをめざして、研究と修養に努める。

評価点：十分できている=4、おおむねできている=3、あまりできていない=2、できていない=1
 総合評価：A：達成できている（3.5<A≤4.0） B：できている（3.0<B≤3.4） C：不十分である（1.0<C≤2.9）

*行動指標として複数の具体例を示しています。その一つ一つに当てはまるか否かではなく、指標を参考にして実践目標に対する自己評価を総合的にご判断ください。

	評価の観点	実践目標	No.	行動指標	関係する	R6		R7		増減
					教育目標					
I 理念・経営方針・重点方針	円滑な学校運営	学校の理念、及び基本方針を理解している。	①	・自分の業務を、学校の理念・方針の中に位置づけることができている。 ・学校の理念・方針をふまえたうえで、学習活動のねらいを生徒に具体的に説明できる。	A、B C、D E	3.1	B	3.2	B	△0.1
		自分が所属している部・年次の経営目標を理解している。	②	・自分の業務を、部・年次の目標・方針の中に位置づけることができている。 ・部・年次の目標をふまえたうえで、学習活動のねらいを生徒に具体的に説明できる。	A、B C、D E	3.1	B	3.2	B	△0.1
	勤務時間の適正化・教員としての資質向上	働きがいのある学校づくりを実践している。	③	・生徒と向き合う時間を確保するために、業務改善に取り組み、メリハリある勤務に努めている。	E	3.0	B	3.0	B	0.0
		人間性と教育観の涵養に努め、教員としての資質向上を図っている。	④	・専門性を高める研究、ボランティア、読書、スポーツ、旅行など、人間性を豊かにし、資質向上につながる時間を作っている。	E	3.0	B	2.9	C	▼0.1
	危機管理体制の整備	本校の危機管理体制、いじめ防止基本方針を理解している。	⑤	・危機管理マニュアルが適切に保管され、自分の関係する部分はおおむね理解できている。 ・いじめの未然防止やいじめが認知された際に、基本方針に沿った対応ができる。 ・様々な研修を通じて学んだことが、生徒・保護者対応等の初期対応に生かされている。	B、D	3.1	B	3.1	B	0.0
		日頃より関係機関との連携を密にし、様々な危機に対応できる体制を整えている。	⑥	・特別な支援、あるいは指導を要するケースについて、関係職員との情報共有(報連相)を心掛けている。	A、C	3.4	B	3.5	A	△0.1

	評価の観点		実践目標	No.	行動指標	関係する 教育目標	R6		R7		増減
II 魅力ある学校・特色ある学校への取組	授業	学習に集中できる環境を整えることに努めている。	主体的に取り組む態度を引き出すための雰囲気づくりをしている。	①	・生徒が安心して学び合える環境を整え、そのための約束事を共有・実践している。	A、E	—	—	3.3	B	—
		生徒の力を多面的に評価することに努めている	全科目定期考査廃止による評価について分析し、評価方法を改善する。	②	・評価の観点や評価基準の改善を進め、生徒に示すとともに、中学校教員にも説明をしている。	A、E	2.8	C	2.9	C	△0.1
		授業力の向上に努めている。	生徒の興味関心を引き出す協動的な学びや、個々の進路実現のための個別最適な授業を行う。	③	・授業の中で、生徒の理解度や進路目標を踏まえた個別最適な学びや、協動的な活動(グループワークや話し合い)を行っている。	A、C、E	3.0	B	3.1	B	△0.1
	探究学習	課題を発見し、解決していくための資質・能力の育成に努めている。	生徒が身につけた知識や技能を関連付け、考えを広げたり深めたりする授業を行っている。		・生徒が自ら課題を見つけ、解決に向けて取り組む活動を取り入れている。 ・生徒同士が対話・協働を通して学びを深める活動を行っている。	A、E	—	—	3.0	B	—
	通級・レジリエンス	特別な支援を要する生徒に対する本校の取り組みを理解している。	通級による指導、自殺防止の取り組み等を理解し、実践する。	④	・高校における特別な支援の必要性を理解し、研修を活用している。 ・特別支援学校と連携し、困難さを感じている生徒に対する支援に取り組んでいる。	A、B、C、D	2.9	C	2.9	C	0.0
	特別支援学校との連携	学校設定教科「共生社会と人間」を適切に実施している。	ノーマライゼーションの進展に寄与する人間観・社会観を醸成する。	⑤	・特別支援学校、地域の人材を積極的に講師に招き、様々な視点から学ぶ機会を設定している。 ・外部機関と連携して授業を進め、実社会で学ぶ機会を設定している。	A、B、C、D	2.7	C	2.8	C	△0.1
		交流及び共同学習を適切に実施している。	授業、行事等、学校教育活動の様々な場面で、両校の生徒がともに活動する機会を設定する。	⑥	・共同の学習活動に向け、両校の担当者が定期的な打ち合わせ、情報共有を行っている。	A、C、D	2.9	C	2.9	C	0.0
高校・特別支援学校両校の取り組みを発信している。		両校の実践を県内のみならず全国へ発信する。	⑦	・両校の実践についてHPで情報を更新し、保護者、地域へ情報提供している。 ・SPIRIT等の記録を作成し配布する。 ・各説明会等で、両校の取り組みの内容を紹介する。	A、C、D	3.0	B	3.0	B	0.0	
III 自尊感情の醸成	自己肯定感	カウンセリングマインドの視点を活かす指導で生徒や保護者対応を行っている。	他の教員と本校の生徒指導方針を共有し、組織的に指導に当たる。	①	・「受容」「傾聴」「共感」により、生徒・保護者の話を丁寧に聞いている。 ・生徒の人格を尊重し、否定や自説の押しつをしないように意識している。	A、C	3.3	B	3.3	B	0.0
		生徒が自分の行動に責任を持つような取組を行っている。	生徒が自ら考え、場面や状況に応じた行動を選択できるように働きかけている。	②	・生徒が自ら考え、行動するよう働きかけ、「やればできる」が体感できる機会を作っている。	A、C	3.2	B	3.2	B	0.0
	自己効力感	生徒の多様な能力・適正・興味に即し、自ら学ぶ学習意欲を喚起している。	体系的なキャリア教育を進め生徒の進路意識を高めるとともに、必要に応じて補習、個別指導等を実施する。	③	・年次、進路指導部や部顧問とも生徒情報を共有し指導にあっている。 ・生徒が意欲的になるような授業の工夫や研究に努めている。	A、C	3.3	B	3.1	B	▼0.2
		部活動を充実させようと努力している。	部活動の意義を理解し、生徒の活動を支援する。	④	・「いきいき運動部活動(4訂版)」をふまえて活動をおこなっている。 ・生徒の主体性、自主性を尊重した部運営を心掛けている。	A、C	3.1	C	2.9	C	▼0.2
	自己有用感	生徒の自己有用感を高める諸活動の内容を理解し、その取り組みを支援する。	生徒会活動を理解し、その活動を支援する。	⑤	生徒会活動について ・活動内容を理解している。 ・当該生徒の取り組みを支援したり、他の生徒を啓発したりしている。	A、D	2.8	C	2.8	C	0.0
		生徒の自己有用感を高める諸活動の内容を理解し、その取り組みを支援する。	高校生ふるさと地域貢献活動、ボランティア活動等を理解し、その活動を支援する。	⑥	地域貢献・ボランティア活動等について ・活動内容を理解している。 ・当該生徒の取り組みを支援したり、他の生徒を啓発したりしている。	A、D	2.7	C	2.7	C	0.0

(アンケートの概要)

- 1 実施期間 令和7年1月6日(月)～2月2日(金) 25日間
- 2 回答対象 教職員 62名/62名 (100.0%)

■今年度について

本校の教育目標に基づき、継続してWeb回答によるアンケート調査を実施した。令和7年度の回答率は、生徒が63.1%（前年度64.8%）、保護者が42.7%（前年度46.7%）であった。保護者の回答率は前年度より若干低下したものの、回答数としては20増加しており、連絡アプリでの配信が浸透していることの表れといえる。

■生徒・保護者アンケートについて

生徒への質問（全14項目）では、10項目でA評価を得ることができた。これは令和6年度と同等の高い評価水準を維持している。一方で、保護者への質問（全15項目）では、A評価は1項目（「特別支援学校との共同の学び」）に留まり、前年度の2項目から減少した。

生徒・保護者の両方から特に高く評価されたのは、「特別支援学校との共同の学び」（生徒3.5、保護者3.6）であった。この項目は保護者アンケートにおいて唯一のA評価であり、本校の特色ある教育活動の柱として、その意義が着実に浸透していることがうかがえる。また、生徒の回答では「学習活動のねらいの説明」「安心して学び合える環境」「理解に合わせた授業」「外部人材の活用」「情報発信」「授業の工夫」「生徒の話を丁寧に聞く姿勢」など、多岐にわたる項目でA評価（3.5以上）が得られており、学校生活全般に対する生徒の満足度は高い状態にある。

■教職員アンケート（行動・実践目標評価）について

教職員を対象とした自己評価（全19項目）の結果、前年度（R6）と比較して値が上昇したのは、「学校の理念・基本方針の理解」「部・年次の経営目標の理解」「関係機関との連携」「多面的評価への取り組み」「授業力の向上」「共生社会と人間（学校設定教科）の実施」「生徒の責任ある行動への働きかけ」の7項目であった。

特に、「関係機関との連携」については評価が3.5となり、A評価を達成している。また、「授業力の向上」や「多面的評価の改善」など、前年度に課題とされていた授業改善に関する項目でも数値の上昇が見られた。一方で、以下の項目については評価が下降、あるいは依然として低い傾向にあり、今後の課題として挙げられる。

1. 教員の資質向上と自己研鑽：「教員としての資質向上（研究と修養）」が2.9（C評価）に低下した。2. 部活動の運営：「部活動の充実」が2.9（C評価）に低下しており、生徒の主体性を尊重した運営に課題が残る。3. 特別な支援を要する生徒への対応：「特別な支援を要する生徒への取り組み」や「交流及び共同学習の実施」は依然としてC評価（2.9）に留まっており、組織的な実践力の向上が求められる。4. 学習意欲の喚起：生徒の「学習意欲の喚起」に関する項目は3.1へと低下しており、生徒アンケートでの高評価（3.5）との間に認識の乖離が見られる。

■分析と今後の改善策

令和7年度の結果から、生徒の満足度は高いものの、教職員の自己研鑽や部活動、特別な支援を必要とする活動において、教職員が依然として課題を感じていることが浮き彫りとなった。特に資質向上のための時間確保や、部活動運営のあり方については検討が必要である。

今後は、生徒が評価している「授業の工夫」や「相談体制」を教職員側も自信を持って実践できるよう、校内研修の充実を図るとともに、多忙感の解消に向けた業務改善を継続し、教員が自己研鑽に励める環境を整える必要がある。また、特別支援学校との連携についても、単なる実施に留まらず、その質的向上と組織的な共有をさらに進めていくことが重要である。